

平成 19 年度
入学試験問題

国 語

特待生
前期

受験番号	氏 名

中村中学校

□ 次の(1)～(10)の——線部のカタカナは漢字に直し、漢字はその読みを答えて下さい。

- (1) 日米シユノウ会議が行われる。
- (2) 一年を前期と後期にクギる。
- (3) 将来を見こんで娘にトウシする。
- (4) この薬はどんな痛みにもキく。
- (5) 激しいキヨウソウの末、主役を勝ち取る。
- (6) 熱が高いので安静にしている。
- (7) はずかしくて、ほおが紅潮する。
- (8) 町並みを忠実に再現する。
- (9) 額に汗してがむしゃらに働く。
- (10) やわらかな日差しが降り注ぐ。

□ 次の1～5のことわざと似た意味をもつことわざをア～クより一つずつ選び、

記号で答えて下さい。

- | | |
|-----------------|-----------------|
| 1、とうふにかすがい | ア、二兎を追う者は一兎をも得ず |
| 2、ちょうちんにつりがね | イ、あばたもえくぼ |
| 3、あぶはち取らず | ウ、紺屋の白袴 |
| 4、医者の不養生 | エ、のれんに腕押し |
| 5、うりのつるになすびはならぬ | オ、待てば海路の日和あり |

- | |
|----------|
| カ、月とすっぽん |
| キ、二階から目薬 |
| ク、蛙の子は蛙 |

③ 次の文章を読んで、後の問いに答えて下さい。

最近いかにも「ものわりのいい」子供たちや若者たちが増えているが、わたしは彼らを見て、本当に「わかっていない」とは思えない。ちっとも「わかっていない」のに、「わかった風」をしていると思う。それは大人の考えが本当にわかっていたり、大人のいうことにしたがおうとしているのではなく、「どうせわかり合えないのだ」と割り切つて、無用な摩擦を避け、適当に「良い子」になって、生活と気分の安定をはかっているのだと思う。

親は安心するであろうが、結局は本当に「わかり合う」ための努力を、両方とも放棄しているのである。これはいまの子供や若者が、ずるいとか老成しているということではない。彼ら自身が少しあとの世代について同じことを感じているはずで、いまの大人が（年齢が上になるほど）、自分と同じ分類体系が通用していると思ひ込んでいるのに対し、若い人ほど実情が見えているのだと思う。

以上は、日本のなかでの世代間の話であるが、同様の関係が、日本と外国、アメリカとソビエト、欧米諸国とイスラム圏、イスラエルとアラブ諸国、Xなどのあいだにあると思う。これらの当事者が、自分の分類体系だけが唯一の真理であると信じ、それ以外のものを排撃している限り、相互理解は不可能で、「わかり合える」ことはできず、結局は武力にものをいわせて相手をしたがわせるしかないという結果になる。世界全体がそういう方向に進みつつあって、本当にわかり合う努力が放棄されていっているのが、現在の危機的状況ではないかと思われる。

⑤ このように、異質の分類体系が相互の理解を拒否する形で対立し合っていると、「わかった風」や「理解ある態度」を示すことは、かえって事態を混乱させる危険もはらんでいる。一つの分類体系に固執している相手に、「理解ある態度」を示すことは、しばしば相手方に、「自分と同じ分類体系をもっている」と思い込ませるばあいもあるからだ。このばあい、相手方が、その態度を示した側の分類体系を理解することはもちろんない。結局は理解し合うことなく、理解していると誤解し合うだけ

である。

(A)、問題の解決はきわめて困難なのであるが、問題点はきわめて明白であると思う。(B)、西欧的な分類体系こそ唯一絶対のものだと信じられていた時代が去ったのである。このときこそ、思い込みの幻想げんそうに安住することなく、本当に「わかり合う」ことが重要であり、その可能性もでてきたのである。

本当に「わかる」とは、異質的な分類体系を理解することである。それは簡単に「わかった」とか「理解ある態度」を示したりできるようなものではない、長い、困難な、相互の努力、通い合うことによってはじめて可能になるような、(C)可能にはなっても、実現はきわめて困難な理解の道である。

「西欧的な分類体系こそ唯一絶対だと信じられていた時代は去った」と書いたが、だからもう **ア** はダメだとか、 **イ** 的分类体系を唯一絶対にせよというのではない。百年たっても、われわれは西欧的な分類体系が「わかった」などといえないのである。

(D)、^⑥いままでは、理解したと思いつ込んでいた傾向けいこうが強い。本当の西欧理解はこれからなのである。それほどに、「本当にわかる」ということは困難である。

それは、 **ウ** の人が、 **エ** の分類体系を理解しようとしなかったということと関係がある。

異分野の人との共同研究のことを思い出そう。一方的な理解などというものは、ありえないのである。欧米人がわれわれを「本当に」理解することを媒介ばいがいにして、われわれも欧米を「本当に」理解しうる。アラブやアフリカとの関係においても同じである。もっとも近い韓国との間にさえ、「本当に」理解し合うという相互努力は、まだきわめて弱いと思う。各々おのおの、自分の分類体系のなかに相手を位置づけて、理解していると思いつんでいる段階にとどまっているのではないかと思う。

こういうわけで、「わかる」とは、自己とは異なる分類体系がわかるということなのである。

(坂本賢三『分ける』こと「わかる」こと)

※分類体系……この本文においては、「もののとらえ方」と考えてよい。

問一 —— 線①とありますが、どのような子供や若者のことをいつているのですか。その具体例として適当でないものを、次から一つ選び、記号で答えて下さい。

ア、友達からマンガ本を借りて、勉強机でこっそり読む子供。

イ、両親が勧めるので、大学受験へ向けて勉強をする子供。

ウ、上司に注意されると、謝って済ませようとする若者。

エ、誰に反対されても、アルバイトをしながら夢をめざす若者。

問二 —— 線②とありますが、子供たちがこのように思うのは、大人がどのような状況だからですか。説明して下さい。

問三 —— 線③とありますが、どのような努力をすればよいと筆者は考えていますか。解答らんに合うように、本文より十五字以内でぬき出して下さい。

問四

X

 に入る言葉として適切なものを、次から一つ選び、記号で答えて下さい。

- ア、宇宙と世界
- イ、文明国と文化国
- ウ、先進国と開発途上国
- エ、江戸と東京

問五 —— 線④「危機的状況」とは、どのような状況のことですか。文中の言葉を使って説明して下さい。

問六 —— 線⑤とありますが、どのような事態になるというのですか。その事態を簡潔に述べている箇所を十二字で、本文よりぬき出して下さい。

問七 (A) () (D) にあてはまる言葉を、次からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えて下さい。

ア、そして イ、要するに ウ、むしろ エ、したがって

問八 ア エ には、A「欧米」、B「日本」のどちらかが入ります。どちらを入れたらよいですか。記号で答えて下さい。

問九 ——— 線⑥とありますが、どういうことですか。その説明として適切なものを、次から一つ選び、記号で答えて下さい。

ア、相手の考えをわかろうと努力しても、結局は理解できないものだったという
こと。

イ、自分の考え方の中に、相手をあてはめて、わかったつもりになっていたという
こと。

ウ、相手の立場に立っていることに安心して、真の姿を見ようとしなかったという
こと。

エ、自分に利益のある考えが、全て正しいのだと考えるようになっていたという
こと。

四 次の文章を読んで、後の問いに答えて下さい。

次の文章は、「私」が中学三年の頃を回想している形で書かれた小説です。

「私」は中学二年で今の中学校に転校してきましたが、友だちもなく、ふと柔道でも稽古してみようかと柔道部に所属します。しかし、柔道部の稽古はやがて「私」にとって荷が重いものとなります。つらい稽古の帰りにK川の流れを眺めることが「私」の日課となりましたが、そのうち、毎日川のほとりに立つ五十歳くらいの女性に注意し出すようになります。

私はいつかその女の人を不幸な使用人に決め込んでいた。一日中働いて、いま夕食の時刻が来ている。家人は賑やかに食卓を囲んで談笑しているが、しかし、彼女は使用人なので、その夕食の卓の仲間入りはできない。自分だけ遅れてあとで一人で食べるのである。彼女は家の者が食卓を囲んでいる時間だけ、自分の身を置くところがないので、毎日のようにこの時刻になると、川の洗い場のところへ出て、水の面を眺めているのである。

① 私はそのように解釈した。そして毎日のように同じ時刻にK川大橋の上に立って、その不幸な女の人の姿を見守った。

しかし、ある日のことである。確か秋の半ばを過ぎた頃だったと思う。私はいつものように大橋の上に立ったが、どういものかその日に限って女の姿を見ることはできなかった。女は必ず姿を見せるに違いないと思った。私は次第に濃くなりつつある夕闇の中に立ちつくしたまま、じっとその洗い場の方へ眼を遣っていった。

② そうしているうちに川の面は次第に夕闇の中に融け込んで、黒い一枚の板になり、川波の音だけが高くなって行った。

私は結局一時間近く橋の上に立っていた。そしてついに女の出て来ることを諦めて、家へ帰ろうと思った時、その洗い場のところに人の来た気配を感じた。その時はもうあたりはとっぷり暮れていて、そこに誰か出て来たらしいことは判ったが、それが自

分の待つている女であるかどうかは判らなかつた。

私はそこへ誰か来たということではほつとした。女の身の上に変つたことはなかつたのだと思つた。女がそこへ出て来ないということは、女が病氣になつてしまつたか、それではなかつたら、雇主から解雇でもされてしまつたか、そうした不幸な事件をいくらでも想像することができた。

しかし、その洗い場に誰か現われたということで私はほつとした。ほつとすると同時に、その人物が果して例の女であるかどうかを見定めた気持になつた。もし女なら、私は安心して帰れるといつた気持であつた。

私は橋の袂からその河岸へ降りて行く道のあることを知つていたので、そこを伝つて降りて行つた。橋の上から見ると、河岸の道は、そこを歩くことができない程暗く見えたが、そこへ降り立つて見ると、家から洩れている電燈の光がそこまで伸びていて、ぼんやりとしてではあつたが、物の形を浮かび上がらせていた。

私は洗い場の近くへ行つて立ち停まると、前方を透かし見た。

やはりいつもの女に違ひなかつた。女は何か抱えて立つていた。私は女がバケツでも抱えているのかと思つたが、次の瞬間、その女の抱えているものが、くんくんといふ鳴声を出しているのを聞いた。私は驚いた。仔犬に違ひなかつた。

女はふいにこちらに顔を向けると、

「そこに居るの、誰かな」

と、唳れたような、かさかさした声で訊いた。II。帰ろうと思つた。すると、

「あんた」

と、女は再び声を掛けて来た。そして、

「どこの子か知らんが、これを棄てておくれよ」

と言つた。私は立ち停まると、

「それ、棄てるの?」

と、思わず訊いた。

「そう。いい子だから、これ、川の中へ投げ込んでおくれ」^④

そう言うと、彼女は仔犬を頬ほおずりするようになっていたが、いきなりその小さい生きものを私の方へ押し付けて来た。私は尻しりこ込みしながら、

「可哀かわいそうじゃないか」

と言った。

「生かしておくともっと可哀そうなの。立つことができないんだから」

女は説明した。

「立てない？」

「そう。足が萎なえているの。——早く殺してしまわないと」

女はまた仔犬を頬ほおずりするようにして、それからまた仔犬を私に押し付けて来た。

⑤
こんどはどうでも受け取らしてやるといった強引ごういんなところが感じられた。女は左手で

私の肩かたを掴つかみ、私が逃にげることができないようにしておいて、右手で仔犬を私の胸にぶつけるように押し付けてきた。

III

。意外に女の力は強かった。女は

私の右肩を掴つかまえたまま、

「意気いき地なし、これ棄てられないの。棄てるのが厭いやなら、これ持ってお帰り」

私にとっては無理難題というものだった。

「厭いやだ！」

「頼たのんでるじゃないの」

「でも、厭いやなんだ」

「お願い！」

こんどは女は口調を変えて、その声を優やさしくした。

「ね、いい子だから、ぽんと投げておくれ。ひと思いに川に投げるのがいいの。よそへ棄てたら猫にやられちゃう」

「飼かったらいいいじゃないか」

すると、女の声は変わった。

「飼えるんだったら、こんなこと頼みはしないよ。ほんとに意気地なし！」

瞬間、私には女の表情が一瞬にして変わったように見えた。女の顔ははっきり見えていたわけではないから、その表情の変わるなど見えよう筈はなかったが、しかし、瞬間、私にははっきりと女の顔が変わるのが感じられた。口が耳まで裂けたような気がした。

私は女の手で突かれた。私はその拍子に何かに躓いて、二、三步よろめいた。と、その時である。女の体は大きく揺れ、動いた。と、同時に川面で物体が水面を叩く高い水音がした。

女は立っていた。川の方を向いて立っているらしかった。私は肩から吊っている靴を手で抱えると、夢中でそこを離れた。

翌日から、私はもうK川大橋の上に立ち停まることはなかった。女が洗い場に姿を見せているかどうか確かめる気持はなくなっていた。私は女が不気味で、その姿を再び眼に収める気にはならなかったが、しかし、その女が別に悪人だという思いは持たなかった。女は不幸であり、女が不幸だということの内容は、自分が考えていたよりもっと多種多様なものだというような気がした。私はいつも不幸な女の立っているに違いない洗い場の方には決して眼を遣らないで、大股でその橋を渡った。そしてその女を見る代りに、橋の行手の人家の屋根の方に拡がっている赤い雲を見るようにした。⑧
天気の良い日はいつも赤い雲が見えた。赤い雲は幾つもの線状をなして拡がっていたり、鱗のように重なり合っただけで見えていたりした。

(井上 靖「あかね雲」)

問一 —— 線①とありますが、「私」は何をどのように解釈したのですか。四十字程度でまとめて下さい。

問二 I III にあてはまる文を、次からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えて下さい。

ア、私は直ぐ彼女に背を見せた

イ、私は女を確かめることをあきらめた

ウ、私は暫く待ってみようと思った

エ、私は逃げようとしたが、直ぐ引き戻された

問三 —— 線②とありますが、この表現からどのような情景が浮かんできますか。最もあてはまるものを次から一つ選び、記号で答えて下さい。

ア、夜が近づき川面はよく見えないが、帰宅する人々を乗せた船が起こす波の音だけが大きく聞こえてくるという情景。

イ、夜もすっかりふけて、孤独な女が、川の洗い場で一人洗濯をすることで立つ波の音だけが響いてくる情景。

ウ、夕方になって水かさが増し、危険を感じた人々がその場を去り、川面で立つ波の音も高いところで聞こえるという情景。

エ、周囲は次第に暗くなり、一日の活動を終えた人々が家路について静けさが増し、川波の音だけが聞こえるという情景。

問四 —— 線③とありますが、どうして「私」は「例の女であるかどうかを見定めた」と思ったのですか。説明して下さい。

問五 —— 線④とありますが、「女」がこのようにするべきだと考えた理由をまとめて下さい。

問六 —— 線⑤とありますが、この表現について説明したものととして、最もあてはまるものを次から一つ選び、記号で答えて下さい。

ア、犬を飼ってやる力がないことを怒る「女」の様子。

イ、いとおしい者との別れを惜しむ「女」の様子。

ウ、家族と一緒にいられない不満を示す「女」の様子。

エ、か弱い者を守ってやろうかと迷う「女」の様子。

問七 —— 線⑥の「物体」とは何ですか。文中の語で答えて下さい。

問八 —— 線⑦とありますが、ここで「私」は「女」の「不幸」をどのようにとらえていますか。最もあてはまるものを次から一つ選び、記号で答えて下さい。

ア、「女」は実際に不幸であるが、その不幸は「私」の想像しえない不幸であった。

イ、「女」は実際に不幸であるが、「私」の想像通りの厳しい境遇による不幸であった。

た。

ウ、「女」は実際には不幸ではなく、家族以外の者と、ひそかに愛情を育んでいた。

エ、「女」は実際には不幸ではなく、使用人という立場を気にしている様子はなかった。

た。

問九 ―― 線⑧とありますが、この情景によってどのようなことが表されているの

ですか。最もあてはまるものを次から一つ選び、記号で答えて下さい。

ア、人間が抱える問題は実に恐ろしく、解決しがたいものであること。

イ、人間が抱える問題ははるか未来の希望につながるものであること。

ウ、人間が抱える問題は単純でなく、一面でとらえられるものではないこと。

エ、人間が抱える問題はやがて温かい人情によって包み込まれていくこと。